女の祕密

圓地文子著

女の秘密

園地文子

新潮社

女の祕密

昭和三十四年十二月一日　印刷
昭和三十四年十二月五日　發行

定價　貳百參拾圓

著　者　©　圓地文子

發行者　佐藤亮一
東京都新宿區矢來町七十一

印刷　二光印刷株式會社

製本　東京牛込加藤製本

發行所　株式會社　新潮社
東京都新宿區矢來町七十一
電話東京三四局代表七一一一(九)
振替　東京　八〇八番

目

次

女の祕密　九
道綱の母　二〇
女の書く小說　二三
唐鞍の幻　三二
灯（あかり）　三六
女のひそひそ話　三九
妻を踏みつける男　四二
女のゆめ　四五
「ひもじい月日」など　四七
「秋のめざめ」の後に　四九
半狂人と家族　五二
異常性格　五五
動物　五七
惡　五九
一葉の人氣　六一
嵐の「女人藝術」時代　六三
老木の櫻　六五
平林さんのこと　六八
宮本百合子さんの思ひ出　七六
宇野さんの「地獄篇」　八一
「命にかへての男……」　八四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

「黄昏の薔薇」　八七
知性の孤獨　八九
東洋の女　九一
古典の男性　九三
源氏の晩年　一〇二
好きな男、嫌ひな女　一〇四
永井荷風の死　一一三
德田秋聲先生　一二三
芥川文學と自殺　一二四
室生先生のこと　一二六
戀愛ぬきの男友達　一二九
高見さんの知性　一三二
三好十郎氏のこと　一三五
櫻の園　一三七
芝居と小説　一三九
歌舞伎のともしび　一四〇
花のある役者　一四二
物語ること、聞くこと　一四七
自分の聲　一四九

眞知子岩　一五一
女の映畫好き　一五三
古い手紙　一五五
新婚風景　一五七
着物と裸　一五九
美　人　一六〇
帶　一六二
隱し藝　一六四
男の遊び場　一六六
父と娘　一七〇
姓　名　一七二
つゆじも　一七四
筆屋幸兵衞　一七六
新年の退屈さ　一七七
梅の花　一七九
彼岸詣で　一八一
花　見　一八三
北上川　一八五
中尊寺　一八八
詩人の母　一九〇
女らしいといふこと　一九二

水の濁り　一九四
夏祭　一九五
花火　一九七
寄席のこと　一九九
淺草隅田川　二〇一
京の味　二〇五
奈良の佛たち　二〇七
悲しまぬ佛たち　二一〇
あいさつ　二一一
屋根　二一三
靴下つぎ　二一五

冬の色

裝幀　高山辰雄

女の祕密

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertong

女の祕密

いつかラジオ東京テレビの企畫で、日本の女の「喜怒哀樂」といふ番組に出たことがある。武智鐵二さんと觀世壽夫さん、藤蔭美代枝（現靜枝）さんと私との座談會形式で、主に過去の日本の女の愛情を現はす表現について話した。觀世さんは能の女面を顏にかけて「隅田川」の狂女の、子供を失つて嘆くところの面を「しをる」所作を見せたし、藤蔭さんは日本舞踊の中の嫉妬の情や喜び、悲しみなどを巧みに踊つて見せた。

俗に「おかめの面」と「般若の面」は女の柔和な相と、嫉妬執着の相を象徴したものといはれてゐるが、過去の日本の女は表面おかめ的な和顏を周圍から要求されることが多すぎるので、內心の般若的怒りの相は底の方へ押しつけられて、實際には「おかめ」でも「般若」でもない能面のやうな無表情に感情を沈潛させるやうになつてゐたと思ふ。

明治時代まで、上流階級と稱する皇族、華族などの家庭では、女の話し聲の大きいのを忌んで、低い聲でものをいふやうに仕つけたさうである。今でも皇后さまの何か讀まれるのをテレ

ビなどで見てゐると、唇を動かさないので、聲がはつきり發音されないやうに見える。たぶんこれなども宮廷的發語法なのであらう。動作を靜かに、聲を小さくといふ表現は、勢ひすべての感情をそのまゝ表現化することをしないで內部に疊み込むことである。かういふ感情表現が日本の女の中で一體いつの頃から保たれるやうになつたものであらうか。女の執念だの、業力などといふ凄まじい强さがその中に孕まれてゐるのかと思ふと、仇や愚かには見過せない。

文學に現はされたもので見て行くと「古事記」や「風土記」の女性は、喜怒哀樂の表現が陽性であつて、能面の象徵してゐるやうな、摑みどころのない愛執とは緣が遠い。萬葉集にしても略々さうである。有名な額田女王の、

あかねさす紫野ゆきしめ野行き
野守は見ずや君が袖ふる

のやうな三角關係の歌にしても、陰濕な暗さは少しも感じられないし、

君がゆく道の長路を繰りたたね
燒き亡ぼさん天の火もがも

わが背子はものな思ほしことしあらば
火にも水にもわれなけなくに

などの情熱歌に至つては、抑壓された無表情な感じは全くないといつていい。

してみると、女性が感情を殺す習慣は王朝貴族文化の遮閉性の中に生まれたものだらうか。

もつとも藤原氏の攝關時代といふのは、後世の武力政治とは違つて、男性の政治家の動きにしても、ひどく陰性なものであるから、その時代の貴族女性の自己を主張するやり方は殊に間接的なものであつたらしい。

源氏物語の中に年の暮れに織殿(おりどの)や染殿から出來上つて來た夥しい晴着を源氏が正妻紫の上の部屋にゐて二人で見るところがある。紫の上は何げなく、

「折角の衣裳が着る人に似合はないのは味氣ないものですから、あなたがふさはしいと思ふものを選んでお上げになる方がようございます」

といふので、源氏もその氣になつて、多くの妻妾や養女などにそれぞれ似合ひさうな色や柄のものを選んでやる。紫の上は鷹揚な樣子でそれを見てゐるが、心の中では源氏の選ぶ衣裳の色や柄によつて、女達の容姿や源氏の愛情の厚薄を觀察してゐるのである。

途中で源氏もふと妻の隱された鋭い眼を感じて、そのとたんに醜い容貌の末摘花に素晴らしく品のよい衣裳を選び出して、紫の上の目論見を巧みにはぐらかしてしまふ。

この件りの紫の上などはたしかに王朝貴女の智慧が働いてゐて、能面的要素を現はし初めて

ゐる。

もう一つ源氏の中で、能面的な業を最大限に發揮するのは六條御息所といふ女性である。

御息所は亡くなつた前皇太子の妃で一人の姫宮を育てながら、優雅な暮らしをしてゐる中、自分よりもずつと年下の源氏の熱心な求愛に負けて、戀仲になる。しかし源氏には葵の上といふ本妻があり、更に父帝の后である藤壺の宮に戀してゐるので、御息所の重すぎる情緒はやがて若い源氏にはうつたうしいものになつて來る。

賀茂の祭の日、使に立つた源氏の晴れ姿を見ようと車に乘つて出かけた御息所は偶然正妻の葵の上の車と行きあつて、葵の上の方の侍臣にさんざん狼藉を働かれる結果になつた。

氣位の高い御息所はそのことに自尊心を傷つけられて、葵の上を深く憎むやうになる。さうしてわれ知らず生靈になつて、產前の葵の上を惱まし、たうとうとり殺してしまふのである。

御息所自身この場合には完全な二重性格で、源氏に對ひあつて恨むといふやうなはしたないことは決してしない。その癖何げなく病み臥すやうに見えて、自分も知らない中に、生靈が葵の上のもとへ天がけつて「現にも似ずたけく嚴きひたぶる心出で來て打ちかなぐり」などするやうに變つて行くのである。

源氏もつひにはそのことを知つて、御息所をうとむやうになり、情交も絕えるのであるが、私は女といふ女から愛され、自分もそれぞれの女を愛してゐると信じてゐる源氏が唯一人の恐

るべき女性として六條御息所を愛人の中に持つてゐたといふことを面白いと思つた。さうしてこれは全く私一個の臆說であるが、私は六條御息所の中に日本の古代神道における巫女の權威の變形したものを見るといふことを曾つて書いたことがあつた。（拙著小說「女面」參照）古代の日本では巫女によつて神の託宣をきく風習が祭政一致に通じてゐた。その風潮は佛敎が皇室に尊信されるやうになつてから、だんだん式微して王朝時代には伊勢神宮や賀茂神社の齋主となる皇女は、佛敎の側からみて罪深い役目と見られてゐる。しかし源氏が皇室の血統を引いてゐる限り、巫女的なものへの潛在意識的な畏怖は當然あるべき筈なので、六條御息所のやうな强い性格を「源氏物語」の中につくり出したことは大變興味のある問題だと思ふ。

現實的にモデル探しをすると私は六條御息所の中に「かげろふ日記」の作者、右大將道綱の母の投影してゐるのを感じる。道綱の母は太政大臣兼家の側室の一人で、一夫多妻の當時の習慣に抵抗した唯一の女性として「文學に於ける自我の發見」の先驅者といはれてゐるが、性格にはかなり偏執的なところが多い。兼家の他の愛妾が子供を生んで、その子が死んだのをきいて喜ぶ氣持ちなど、嫉妬心の强い女なら當然持つてゐる筈のものだが、筆にしてまで殘すといふ氣持ちには異常なものがある。蛇が胸の中に住んでゐる夢をみたと書いてゐるのなども一例で、私はこの人の性格は「かげろふ日記」を通して「源氏」の中に移され、それは六條御息所

の性格として發展して行つてゐると見てゐる。

「男に愛される女の原型があるやうに、男から怖れられる女の原型もある筈である」と私は「女面」の中で書いた。男からみて、どんなに上はべが手剛く見えても自分の中に溶解し切れる女は愛し得る筈であるが、その反對にどんなに上はべが靜かに軟かげに見えても、底の方で强情に自分に執して離れないもののある女は男にとつて怖い筈である。

六條御息所に表現されたさういふ內潛的な自我は、封建時代に入つて女の生活が固い家族制度の枠の中にきつちり閉ぢこめられてしまふやうになるにつれて、いよいよ外面と內面との背反するものを强固にすると同時に「外面如菩薩」の相を磨き上げて行き、結局それは能の「女面」の內潛的な美へまで抽象化されて行つたと思ふのである。

はじめに書いた女の喜怒哀樂の相にしても、封建時代の女性の喜怒哀樂の殆んどすべては男を對象とするものとして表現されてゐる。從つて、怒りの相の顯著に現はされるのは、男に對する嫉妬の情であつて、謠曲の「葵の上」や「道成寺」などは皆それを扱つて成功してゐる。

さういふ鬼女ものでなくても、私はいつか、野口氏の「松風」をみた時、謠曲の本文をよんだだけでは全く感じることの出來なかつたのに、姉妹が一人の男に戀する嫉妬の情が、あの無表情な女面を通して、ひしひしと迫つて來るのに凄氣を感じたことがある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong